

○バッハ「パルティータ第4 & 6番」ほか 欧州で高い評価を得ているピアニスト金子陽子が、18世紀末の名器を復元したフォルテピアノを奏して洗練された表現を聴かせる。緩やかな楽章での甘美な歌い回しはことに絶妙。独自の調律法による響きの輝きも味わい深い。(MAレコーディングス)

J.S. Bach, Partita n°4 & 6, Suite Française n°5, Fantasia et Fugue
Yoko Kaeko, Pianista



D i s c R e v i e w

T h e R e c o r d

モダン・ピアノでバッハを弾き美しい成果をあげ得るのならば、フォルテピアノで同様の成果を得ることに、創造的な芸術家として、なんの遠慮が必要なのか、と。いま、フォルテピアノで見事に美しく奏でられたバッハを知るとき、私たちは、そこにまごうかたないひとつの「美的真実」を認めぬわけには行かない。金子陽子はこのCDで二長調とホ短調の《パルティータ》を弾き、両者のあいだをイ短調の《幻想曲とフーガ》、ト長調の《フランス組曲》で埋めているが、この取り合わせと配列も絶妙の域にある。とりわけ《幻想曲とフーガ》(BWV904)もピアノの音性のうちで、これほどまでに際立つとは。もとより、

他にも新鮮な発見をちり

ばめた、これは珠玉の1枚である。

峰尾昌男 ● Masao Mineo

【録音評】姉妹誌「ステレオ」にインタビューが載っていた当レベルによるワン・ポイント録音。過去にもいくつかとてよい録音を聞いたが、今回もその特長がよく活かされていた。会場はよくわからないがあまり大きく、音も楽器そのものの音に集中しベストなものを探したようである。フォルテピアノでもあった音色だ。(94)

なれば、モーツァルトの時代のピアノでバッハを弾くことになる。現在ジルバーマンによるバッハがいくつもリリースされていることを考えれば、微妙な感じだ。ウイーン式アക്ഷシヨンの瞬発力の強いアタックはジルバーマンのそれとは違うし、両者は音色や表現力で異なる。もちろん現代のピアノよりは、金子の演奏は明快で生き生きとした表現によるもの。(《パルティータ》第4番は各舞曲の特徴が良く出ている。変化に富んだアー

濱田滋郎 ● Jiro Hamada

【推薦】かつてはモダン・ピアノにより、独奏家、室内楽奏者として活動していた金子陽子だが、ヨーロッパ生活を重ねるうち、インマゼールに就いてフォルテピアノを修得する機会を得た。このころはこちらのジャンルで名声をあげている。先年はモーツァルトの佳演CDがあったが、このたびはJ・S・バッハである。ちよつと考えると、だいたい18世紀後半からさかんに実用に供されていったフォルテピアノでバッハを弾くのは、アナクロニズムのように思われる。だが、さまざまな記録によれば、バッハは、初期のフォルテピアノを確かに識っており、自ら試奏したこともあったのだ。そしてまた次のようにも言える――

■ J.S.バッハ：パルティータ第4番
／幻想曲とフーガBWV904／フ
ランス組曲第5番／パルティータ第
6番
金子陽子 (fp)
[M-ALレコーディングス@MAJ510] ¥2800

那須田務 ● Tsutomu Nasuda

【進】ピアノは1700年頃にクリストフォリによってイタリアで発明されたというのが今日の定説だ。そのアイディアはドイツに紹介され、ジルバーマンが製作を開始。バッハもその楽器を弾いている。その後18世紀末にシュタインによつてそれは別の打鍵機構の楽器が開発され、後続の製作家たちに受け継がれていく(これをウイーン式アക്ഷシヨンという)。したがって、バッハも初期のピアノで弾くことはとても理に適っている。でも、ここで金子陽子が弾いているのは、ウイーン式アക്ഷシヨンのヴァルター・モデル(調律にはA・ジルバーマンのオルガンから算出した音律を使用)。つまり、今回の試みはいう